

「ボランティアファンド学生チャレンジ賞 2011」の審査と中間報告

明治学院大学では、大学の理念を実現するために、公認ロゴグッズの購入を通じて社会に貢献する仕組みを作った。このグッズの本体価格の10%を積み立てて、大規模災害の被災者支援や環境保護活動に役立てようという試みが2005年の秋から始まった。これが「ボランティアファンド」である。ボランティアセンターは、2006年度からこのファンドの受け入れを行い、2011年度は、2010年度の売上高の10%の906,980円を受け入れて、過年度からの繰り越しを含めた2,719,094円を運用している。

本センターでは、このファンドを原資として、2007年度に「ボランティアファンド学生チャレンジ賞(通称ボラチャレ)」を設立し、学内のボランティア団体や新しく活動を始めようとするグループによる企画の実現を支援してきた。初年度の2007年度は「環境保護」に関連する企画案を募集し、3企画の応募があり3企画を助成した。2008年度からは、助成対象を「明学生のボランティアによるキャンパスのある身近な地域での地域貢献活動」に広げ、「地域」「ボランティア」「明学生」のキーワードに合致した企画募集を行ったことにより、多くの応募につながった。

2011年度は、3月11日の東日本大震災による影響から、これまでの募集テーマの「地域」を取り除き、「明学生によるボランティア活動」を広く支援することとなった。これまでと同様に、地域に根差した活動に加えて「ボランティアファンド」の用途として想定されてきた、大規模災害の被災者支援や環境保護活動についても積極的に助成を行うこととした。

2011年度は震災により学暦が変更となり、例年より遅れた形での募集のスタートとなったが、6月9日～6月30日の間に8企画の応募があり、その企画内容のうち震災に関連した企画は半数におよび、7月9日に白金校舎にて公開審査会を実施し、好評価を得た。公開審査会では5名の審査委員(松原副学長、学外の有識者として白金地域より嶋委員、戸塚地域より前嶋委員、原田ボランティアセンター長、浅川ボランティアセンター長補佐)および学生等の一般聴衆を前に、企画ごとに企画内容のプレゼンテーションが行なわれた。続いて審査委員による審査会が開催され、応募全部の8企画を助成企画として選定し、総額528,340円を助成した。7月20日には横浜校舎にて授与式を実施し、学長から受賞企画の代表者に奨励金が手渡された。

各企画は活動期間を経て、11月16日に横浜校舎で中間報告会が行われた。中間報告会の第一部では受賞団体が活動の進捗状況や抱えている問題などについて発表した。第二部では、学生が地域に関わることで何を感じ、何を学んだかを整理し、さらに深化・発展させるための気づきを得ることを目的とし、受賞団体メンバーによるグループワークを行い、活発な議論が交わされた。各企画団体はこの後、中間報告書を執筆し、本報告書に掲載され、最終的には5月の最終報告会での発表が予定されている。当該年度のチャレンジ企画は終わることとなるが、これを契機にさらなる飛躍を期待している。

(中山)

ベトナムへ届けよう！～東日本大震災後の日本の現状と感謝の気持ち～

【はじめに】

私たち JUNKO Association は、ベトナム・ミャンマー・ビジネス・SR という4つのプロジェクトの中で、「世界の恵まれない子どもたちのために」と「学生による創造と実践の場」の2つの理念のもと、今後さらなる教育支援活動の充実を目指し、日々活動を行っている。発足17年目となる現在では、ベトナム・ミャンマーにおいて異文化交流を通して相互理解を促進する交流活動、学校に通うのが困難な子どもたちに対して助成金の支給を行っている。またその資金を収集するために学生がベトナム・ミャンマーで雑貨を買い付けて、日本で販売活動を行っている。そのほかチャリティコンサートや写真展を実施し、ベトナム・ミャンマーの子どもたちのために国内啓発活動も実施している。

【企画の目的】

去る2011年3月11日に発生した東日本大震災は、日本に甚大な被害をもたらした。未曾有の大震災と言われた今回の震災からいち早く復興するため、震災直後から国内外の多くの人々が精力的に様々なボランティア活動を行っている。そのような中で、私たち JUNKO Association（以下 JA）として出来ることは何か話し合ったところ、私たち JA の活動拠点であり、普段から関わりを持つベトナムの人々に、日本で起きた東日本大震災の「今」を伝えることではないか、という意見が多く挙がり、当企画の立案に至った。当企画では、実際に被災地に赴いたメンバーの体験談や感じた想いを交えながら、震災の現状を伝えることを目的としている。また、当企画を実施することを通して、対象地域とのつながりをより強め、民間レベルでの日越間の相互理解が深められると考えている。

【企画の内容】

・東日本大震災報告会

私たちは、「学生の視点」で見た東日本大震災の現状や被災地の様子、そこに生きる人々の姿を直接伝えることに意味があると考えた。実際に被災地に赴いた JA メンバーの口から被災地で行った活動、そこで出会った人とのエピソード、活動を通じて感じたことなどを報告した。対象者は活動地域であるベトナムの中部都市ダナンの大学生約100名と、活動拠点であるクアンナム省ディエンバン地区ディエンフック村の地域住民約50名である。報告会では、私たちの想いを感じ取ってもらうため日本語で発表し、現地協力者の方に通訳して頂いた。報告会後は感想・質問コーナーを設け、意見交換をした。「日本人の団結力に感銘を受けた」、「日本の復興を心から願っている」という意見を貰い、感慨深いものとなった。

・東日本大震災写真展

写真展はダナン市内の大学のスペースを借りて行った。被災地に足を運んだメンバーがカメラに収めた被災地の写真やそこに生きる人々の姿を展示した。一つ一つの写真には、メンバーが直接見て感じた「想い」が記されたメッセージを添えた。また、東日本大震災の概要や復興の様子を記載したポスター

や、日本で行われている防災活動を記載したポスターも展示した。ベトナムでは行われていない日本の防災活動に、多くの方々が関心を寄せていた。



写真展の様子



報告会の様子 みんな真剣に話を聞いている

【企画の経過】

8月中旬まで：東日本大震災報告会、写真展準備

8月下旬～9月下旬：ベトナム夏季短期学生派遣、東日本大震災報告会、写真展の開催

【活動を通して得たこと】

当企画を通じて最も嬉しく感じたことは、会場に来てくれたベトナム人の反応である。報告会では、皆真剣に話を聞き、質疑応答では活発に質問をし、日本語で日本に対する応援のメッセージを送ってくれた。震災直後、「世界はつながっている。みんな一緒だ。」というような言葉を沢山目にしたが、正直そのような言葉は私たちの中でしっくりきていなかった。しかし、今回来てくれたベトナムの人々の日本に対する姿勢を見て大変感動し、その言葉の意味が少し分かったような気がした。また、写真展では「ここはどこ?」「あなたは被災地で何をしたの?」と沢山の質問を受け、自分の活動や感じたことを話すことが出来た。“ベトナムと日本を繋げる”といった大きなことは出来なかったかもしれないが、私たちとそのベトナムの人々との間で、繋がりを持つことは出来たと強く感じた。

【課題と展望】

当初の計画では、報告会・写真展を実施することを企画としてきた。しかし、当企画を通じて多くの人々との繋がりを持つことができ、新たな可能性が広がった。地域住民や学生の意見を聞いたことで、ベトナム、特に活動拠点のディエンフック村が低地な場所にあるため、洪水の被害に遭いやすい環境だとわかり、毎年のようにこれがおき、現地は大きな被害を受けていることが明らかとなった。しかし、ベトナムでは自然災害に対する民間への対策が施されていないという現状がある。そこで、今後は自然災害に対する知識や認識、行動規範などの講習を行っていきたいと考えている。まずは対象を支援先の子どもたちに絞り、災害に対する危険意識を向上させることで、少しでも被害を未然に防ぐ手段や、被害の減少に繋がればと考えている。

(任意団体 JUNKO Association 国際学部国際学科2年 和田彩音)

ペンパルコミュニケーション－FACE to FACE－

【はじめに】

私たち JUNKO Association は、ベトナムとミャンマーの子どもたちに教育支援を行っている明治学院大学任意団体である。1年に2回、学生自身が夏休みと春休みを利用してベトナム・ミャンマーを訪れ、子どもたちとの文化交流や助成金支給、教育器材の寄附などを行っている。また、その資金を収集するために、学生がベトナム・ミャンマーで雑貨を買い付けて、日本で販売活動も行っている。その他、チャリティライブやチャリティコンサート、写真展を実施し、ベトナム・ミャンマーの子どもたちのために、国内啓発活動も実施している。

ミャンマープロジェクトは、2001年から活動を開始し、今年度で10周年を迎えることができた。ミャンマーでは、現在バゴー管区レパダタウンシップを中心に計5か所の学校、孤児院での活動を行っている。

【企画立案経緯・企画内容】

私たちミャンマープロジェクトの活動先であるミャンマーのバゴー管区レパダタウンシップは、外国人が訪れる機会が少ないために、外国からの情報や異文化に触れる機会が皆無に等しい状態にある。一方で、日本の学生たちは外国の文化に触れる機会はあるながらも、情報統制の厳しいミャンマーという国の文化に触れる機会はあまり多くはない。「そんなミャンマーの子どもたちと日本の生徒・学生が、『手紙』というツールを使うことによって、『つながり』を持つことができるのではないか」という思いから、私たちは、ミャンマーの子どもたちと日本の生徒・学生を「ペンフレンド」とし、相互理解を促進するための「ペンパルコミュニケーション企画」を立ち上げた。「この企画に参加することで、今まで情報がなかった互いの国を知り、異国の文化に触れ、視野を広げるきっかけになるのではないか」と考え、10年前からペンパルコミュニケーション企画を実施している。現在、ミャンマーのバゴー管区レパダタウンシップのNo.1 Basic Education High Schoolの9年生から11年生と明治学院大学の学生、森村学園高等部、川崎市立橋高等学校、横浜隼人高等学校、横浜市立戸塚高等学校、多摩大学付属聖ヶ丘高等学校の生徒たちの計177ペアが文通を行っている。そして今回私たちはさらに発展し、「相互理解を促進するための異文化交流を行うことはできないか」と考え、このペンパルコミュニケーション－Face to Face－企画を立案した。以前から両国の学生・生徒たちから、



手紙をもらった生徒たち

「もっと相手の顔の見える交流ができないか」との声が挙がっていた。そこで私たちは、自国の文化の紹介やメッセージ、学校生活などを、ビデオを通して視覚的に相手国の学生・生徒たちに伝えることで、ミャンマーの生徒たちと日本の生徒・学生を繋げ、相互理解を深められればと考えた。

【経過と実績】

今年度9月に1か月間ミャンマーを訪れた際、No.1 Basic Education High Schoolの生徒たちに、私たちが日本で撮影して作成したビデオを上映してきた。今回は「日本の大学生の1日」という題で、日本の大学の様子や街並みなどを中心に、大学生の1日をストーリー仕立てにビデオを作成した。

上映後に生徒たちにアンケートを取ったところ、初めて映像で見る日本の大学生の日常に、とても良



ビデオを見る生徒たち

い評価がもられた。そしてその映像から、「日本の食べ物やファッションに興味を持った」との意見や、「次回は高校生の様子をビデオで見たい」などの意見もあった。

【今後の展望】

現在、横浜市立戸塚高等学校の生徒のみなさんに、「自身がミャンマーの生徒たちに、どんなことを紹介したいのか」ということから話し合ってもらい、2月にミャンマーで放映予定のビデオを作成していただいている。「相互の生徒・学生が自発的にメッセージを発信し、文化を分かち合うことができれば」という想いから、ビデオの作成を高校生主体で作成してもらおうと考えている。また、文化紹介にとどまることなく、このペンパルコミュニケーション企画が、さらに深く両国の生徒・学生をつなぐきっかけになるように、一対一のビデオメッセージの作成ができればとも考えている。

これからも JUNKO Association が、その双方を繋ぐ架け橋になることを強く願っている。

(JUNKO Association ミャンマープロジェクト 国際学部国際学科2年 高田真利子)

一人よりみんなでプロジェクト from3.11

【企画背景～思い～】

「Change from 3.11」は、3月11日の東日本大震災支援に携わり、主に岩手県や宮城県で活動してきた学生が主体となって活動している団体である。2011年3月11日、戦後最大の危機と言われる地震と津波が東日本を襲い、沢山の人が犠牲になった。復興には時間がかかると言われる一方で、この出来事が忘れられていく事を、他人事のように捉えられてしまっている現実を肌で感じる。実際にボランティアに行った学生が、震災支援活動の中で良く言う事は、コミュニティの重要性である。コミュニティとは人と人との関わりの中で作られていくものであり、社会の基盤としてあるものだ。震災が起きて、携帯、車、お金、電気、水道、ガス等のあらゆるものが使えなくなった時、人を助けたのは、まぎれもなく『人』（コミュニティ）であった。その事実は、本来手段であるはずの「もの」に目的が支配され、物事の意味を見失いがちな日本で、もう一度考えなければならない事だと思われる。また一方で今回の地震を機に、多くの学生が被災地にて活動し、社会的な意識を高めた。この意識を一時的なものに留めるのではなく、次なる社会作りへと繋げて行くべきだと考える。その為に被災地の現状を伝え、考える場を作るというのが今回の企画のコンセプトである。

【企画の内容】 伝える3つのプロジェクト

① 震災支援を行っている大学生同士の勉強&交流会

今回の震災により現地で活動している大学生は大勢いるが、その横の繋がり場というのはいまいち思われる。そこで、この企画の趣旨に賛同しているカフェを借り、ありきたりの交流会に終わらせずに、現地で活躍している方をお招きして、勉強会&交流会等を行う。

② 高校や地域コミュニティ等向けのプレゼン&ワークショップ

世間では今回の震災に対する関心は高いが、日常生活を送りながら、現地でボランティア活動を行うのは難しいという現状である。そこで被災地で感じた事やそこから見えてきた社会的問題等、高校生や地域の方々と共に考える場を作る。

③ 震災支援商品の掲示&販売

岩手県にある「復興の狼煙」ポスターを明治学院大学内外で掲示をし、より多くの方に関心をもってもらおう。この活動は被災地の思いを広げ、伝えると同時に、このポスター販売に協力して、その売り上げを義援金として被災地に募金する活動である。

【実際の活動／活動を通して見えてきたもの】

① 震災支援を行っている大学生同士の交流会&勉強会

10月26日にLab-caféというカフェを借りて、ゲストに岩手県大槌町で心のケアを行っている精神科医の森川すいめいさん（国際医療連盟 東京支部代表）をお招きして勉強会を行った。8大学23名が参加（東京大学 早稲田大学 立教大学 明治学院大学 フェリス女学院大学 国際基督教大

学 東洋大学) した。実際に現地で活動する中で、学生が感じる様々な事象の捉え方を、精神科医の立場から話をされ、とても有意義な会を設けることができた。今回は、2月にNHK チーフプロデューサーの河瀬大作さんをお招きしたいと考えている。



大学生同士の勉強会&交流会の風景



復興の狼煙ポスターの掲示

② 高校や地域でのプレゼンテーション&ワークショップ

現在までに、キリスト教愛真高校、明治学院大学(チャペル、インターナショナルラウンジ)北九州市立高校、横浜商業高校国際学部、めぐみ幼稚園(保護者の方向け)東八幡キリスト教会、恵泉教会、独立学園高校で、プレゼンテーション&ワークショップを行った。多くの人に出会い、話をする中で、今回の震災を自分の問題として捉えようとする若者が、とても多い事に気がついた。また、この出会いを通じて、実際に岩手や宮城に足を運んでくれた学生もおり、被災地での出会いが、また新たな出会いへとつながっているのだと思う。そして、現地に行った学生が私たちと同じように、活動を発表する機会を自分たちで考え、行なっているということがわかり、この活動が私たちの知らない所で、広がりを見せている事を嬉しく思う。

③ 震災支援商品の掲示&販売

「復興の狼煙」ポスターの学内での掲示はかなり反響があり、掲示終了日には「もっと見たかった」との声も聞かれた。また、各プレゼン場所でも提示を行ない、好評を博したため、今でも大事に飾ってもらっている。販売については地域の戸塚ふれあい区民まつりにて行い、足を運んでくれた皆さんにとっても喜んで頂き、購入へとつながった。反省としては「復興の狼煙」の販売元に確認のないままに、今回の活動を進めたことである。後に、先方と連絡が取れて、このような活動について理解していただいた。

【感想】

このような機会が与えられ、大学生活が一年目から非常に充実したものとなった事を感謝している。私は、色々な事がある世の中で、ボランティアを通して社会が少しでも良くなればとの思いで活動を続けてきた。この活動を通しての人との出会いは、私にとって人生で忘れられないものとなった。今回の震災を通して、人間というのは、人との関わりの中で生きているのだと強く感じる。しかし、私たちは、自分の足で自分の人生を歩まなければならない。だからこそ不安を抱える時代で、独りで生きるのではなく、他者と共に生きる、それが本当の「生き方」なのだとして3.11から考えている。

(Change from 3.11 代表 国際学部国際学科1年 奥田愛基)

Draw For Future ～画家への一歩～

【はじめに】

この企画は、ミャンマーとベトナムに対して教育支援を行っている JUNKO Association（以下 JA）のビジネスプロジェクトである。年に二回、ミャンマーとベトナムに行き、現地の雑貨を買い付けて日本で売り、そこで得た利益を基に、現地の子どもたちのための教育支援を実施している NPO 法人である。地場産業とタグを組み、JA オリジナル商品を作るほか、JICA とのコラボ商品に乗り出している。今回ボランティアファンド学生チャレンジ賞として、助成金を頂くことになった“Draw For Future”企画も教育支援の活動の幅を拡大させるために、その助成金を活用している。

【企画内容～動機～】

私たちが今回注目したのは、支援先であるミャンマーのレパダン管区にある孤児院（以下レパダン孤児院と記す）である。そこにいる子どもが所持している洋服の枚数に衝撃を受けた。一人につき、たったの一枚という現状に、「どうにかしなければいけない」という強い衝動に駆られ、彼らのある特技に着目した。それは、Picture（絵）を描くことである。彼らは絵を描くことが大好きで、描くことに夢中になっている彼らの様子やまなざしに突き動かされるものがあったことが、今回企画立案させて頂いた理由である。その子どもたちの絵に対する情熱を、彼らのための支援に結び付けられないか、そして、『子どもたちと一緒に商品』を作れたら、なんて素敵だろうと思ひ、立案した次第である。ところで、皆さんはレパダン孤児院についてご存知だろうか。ここでは、現在、赤字財政という問題を抱えており、孤児院側から子どもたちに対して、衣類の供給が大変困難な状況である。ゆえに、たったの一枚だけしか洋服を持っていないといった子どもたちが、非常に多くいるという現状である。私たちは正直困惑した。ファッションを楽しむどころか、着られる服があれば何でもいいと言う子どもたちのセリフが耳に残った。

【企画内容～システム～】

1. 現地の子どもたちに向けて

『子どもたちの絵を商品化』し、彼らに絵を描く喜びを実感してもらい、また自分たちの絵が商品化されて、日本で売られることで、達成感と成功体験を同時に感じてもらい、新たな可能性を見出すことが出来る。

孤児院の衣服不足という深刻な問題に対して、ただ単に衣服を集めて、それを渡すという方法以外に支援出来ないだろうかと思ったのである。また、孤児院の子どもたちの多くはストリートチルドレンであり、彼らの社会的地位は将来的にも低いことから、夢を実現する職業ではなく、賃金を稼げる職業

を求めてしまう。この状態を少しでも改善したい、だからこそ、彼らが好きなことで、彼らに今起きている問題を解決できないかと思い立ったのである。彼らの可能性を広げる役割を担えるのではないかと感じたのである。

2. 日本国内に向けて

国内で販売することによる日本で期待される効果については、購入してくれる方にとっては、「顔の見える支援』が実現し、現地の現状を伝えることが可能になる。日本での販売を通して、子どもたち自らがデザインしたTシャツを日本の誰かに着てもらっているという喜びを、子どもたちに感じてもらいたい。そして、将来に向けて、レパダン孤児院の子どもたちの描く絵がTシャツのデザインとなり、そのTシャツが彼らの手に渡ることで、衣類不足という問題が解決できる。さらには、絵を描く喜びを実感でき、子どもたちの将来の可能性を切り開くことができると考える。

また、上述のとおり、日本での購入を通して、現地の啓発ができると考え、現地の状況について少しでも知ってもらえたら、今回の企画は成功だと自負している。



3. 最後に

私たちは、現地に行くのが年に二回のみであり、その中で企画を動かしていくのがかなり大変であった。現状では、やっと彼らの描いた絵が手に入ったが、色付けはされておらず、その色入れ作業やTシャツのデザイン作りに追われていた。ようやく、その作業も終わり、これから発注するフェーズまでたどり着いた。

この企画を通して私が切に感じたことは2点ある。一つ目は、この企画は、自分一人であったら、決して成し得なかったことである。現地に行って絵を書いてきてもらう係の人、その絵の色付け、デザイン決定、そして業者選びに至るまで見事なチームワークで、ここまで来れたことを実感した。また、メンバーそれぞれが、子どもたちの小さな、しかし光り輝く夢のお手伝いをできることに、誇りを持って実行できていたと思う。主役は、私たちではなく、現地の子どもたちであるということを常に念頭において活動できたと思う。最後に次の言葉を紹介させて頂きたい。松井選手の高校時代の恩師である山下智茂監督が彼に向けて贈った言葉である。『花よりも花を咲かせる土になれ』

(任意団体 JUNKO Association 社会学部社会学科 1年 金澤 峻)

倉田小学校と明学生で取り組む、倉田防災活動

1. 目的

この活動は子どもたちと実際に町を歩き、既存の防災マップを見直して、もっと楽しいものに作り替えるというものである。そして普段から見てもらえるような地図にし、地域に愛着を持ってもらう。また、「自分たちでも地域を守ることができる」というエンパワーメントを目的としている。そして最終結果として、その地図が地域に広まり防災につながるという事を目的としている。

2. 活動の経緯

この企画を発案したのは、宮城県出身の自分自身の経験がきっかけとなっている。3.11の大地震の際、自分の住む町内では大人よりも早く子どもが動いた。子どもたち一人ひとりが、町内の各家々を巡回し、安否確認をして公園までの避難の誘導をした。「そのような子どもたちが地域を支える仕組みを、大学周辺の地域でも行えるようになるのではないか」と考えたのがこの企画の発端である。そして「この企画をぜひ小学生と共にできないだろうか」と考え、大学近隣の倉田小学校校長先生に企画を理解して頂き、実際に作成することとなった。

3. 概要

地図の内容としては、これまでの既存の防災マップを基に実際に子どもたちに町内を歩いてもらい、地図に掲載されている場所が本当に危険なのか、他に危険なところがないかを確認してもらう。また、普段から手に取ってもらえるような地図にするために、町内で楽しめるような場所がないかも探してきてもらい、それぞれを地図に記載し、一つの地図にする。

4. 活動内容

今回のプロジェクトは6年1組の総合学習の時間で取り組むこととなった。テーマは「東日本大震災について学ぶ」である。そのため地図の作成だけでなく、東日本大震災について学ぶ機会を設けた。地図を作成するにあたり、目的を明確にすることは地図を作成する意欲につながることから、子どもたちと共に震災について学び考えながら、時間をかけて作成していく事となった。

活動の第一段階として、初回の授業で実際に自分の経験を話し、「自分の地域では大人よりも子どもの力が発揮された」ということを話した。そしてそれを踏まえた上で、子どもたちが「震災についてどのように考えているのか」というディスカッションを行い、その後防災マップを作成しようという話を打ちかけた。子どもたちと相談した結果、書籍やニュースを調べたり、私たちの話を基にまとめるという事を決めた。また、小学生自身が被災地に向けて何か行えないかを検討した結果、私たち大学生と

共に、戸塚駅前にて募金活動を行うことになった。募金によって集まったお金は子どもたちと相談して、募金先を検討していく予定である。

活動の第二段階では、実際に自分の住んでいる町内を歩き、既存の防災マップの危険個所の確認と新たな危険個所を探した。さらには地図を気軽に見てもらうために、町内で楽しめる場所を探してもらい、魅力ある地図を目指した。

5. 活動を通して得た学びと今後の課題

活動の中ではこれまでの既存の防災マップに記載されているような危険個所だけでなく、新たな危険個所も発見することができた。例えば、私たちが話した東日本大震災の体験談をもとに、「地震が起きたらこの場所は車が通れなくなる」、「この公園は防災本部設置場所になる」など、今回の地震の被害のもととなった内陸地特有の危険個所や必要な情報を、発見することができた。私たちは子どもたちに体験を話すことで「伝える力」が改めて必要であると痛感し、自分の大学周辺についての理解が深まった。

今後の活動としては、子どもたちと共に集めた情報を細分化し、オリジナルの地図記号や写真などを用いて実際に地図に書き込んでいく作業を行っていく。地図は完成後には小学校や大学、またその周辺の公共施設においていただく予定である。

▼授業にてマップ作成の手順を説明する様子



▲実際に町を歩き調査している様子

(ボランティアセンター横浜学生スタッフ 社会学部社会福祉学科1年 宮本浩太郎)

Link with 石巻 「つなぐ ～学生の力を復興の力へ～」

【はじめに】

私たち「Link from 311」は2011年3月11日に起きた未曾有の災害を受け、個人でボランティアとして活動していた学生を募って、6月中旬に出来た団体である。各々がそれまでに被災地で感じた思いを東京で話し合い、「自分たちには何が出来るのか」という根本的なところからスタートし、現在までに3つの活動を行ってきた。コンセプトは「力をつなぎ、感謝をつなげ、心をつなぐ」である。活動に沿った3つの志を掲げ、人と人のつながりから生まれる力や思いが、必ず復興の一助となると信じ、日々多くの人たちと関わりながら過ごしてきた。

●企画1：「力をつなぐ」

この企画は、学生の余りある体力としての「力」を復興の力へとつなげることを目的とした活動である。同時に少しでも多くの学生に「被災地の状況を自分の目で見て考えてもらう機会を作ろう」という思いから始めた活動でもある。内容は、宮城県石巻市で実際に大きく活動していたNPO団体「apbank」「ピースボート」のボランティアプログラムへの学生（明学生他）派遣、及び活動を一緒に現地石巻にて行うというものである。初めに、7月中の全週末に行われた apbank のボランティア活動に、学生約50名と共に参加した。また、ピースボートからは、「8月23～27日のボランティアプログラムが人数不足だ」という連絡が入り、約50名の学生たちと共に石巻へ向かった。石巻での活動内容は、主に泥掻きを中心とした清掃活動だった。東京では、日々、講演やチラシ配り、インターネットを利用した発信など、広報活動を行なった。結果としては、多くの学生から様々な感想を貰い、何人かの踏み出せない学生の壁を取り払う事が出来たと実感している。また、この活動に一度参加した学生は、その後個人で活動を続けている人が多く、次につながる良い流れを作り出すきっかけにもなれたと思う。しかし、その一方で各NPO団体との人数調整が難しく、「現地に行きたい」という思いを持った学生全員のボランティアのニーズに答えることが出来なかったことは、反省すべき点である。

●企画2：「感謝をつなぐ」

この企画は、東京での被災地の商品販売を通して、被災者である売り手、復興支援を願っている買い手と共に、つながりを直に感じてもらうことを目的とした活動である。具体的には、宮城県石巻市で販売されている商品を、東京都江東区亀戸の商店街で行われるお祭りの中で、販売の代行を行った。石巻で関わりがあった人々や、東京で町づくりに関わっていた商店街に声をかけ、物品の輸送から販売、お祭りの準備までを私たちが中心となって行った。

販売した商品は、宮城県石巻市の水産加工会社「木の屋」が販売している缶詰3種と、宮城県石巻市立渡波小学校の避難所で活動しているボランティア団体（現地の方を含む）「ワタノハスマイル」の活動



費（主に炊き出し）を算出するために作られた缶バッジである。販売日は8月20、21日の計2日間で、缶詰は300個完売し、缶バッジも計250個におよび約8割を売ることが出来た。

この活動は、石巻の方から日々ボランティアに対して「ありがとう」という一言の力を感じ、逆に自分が勇気づけられていることで、「こちらの感謝をつなげよう」という思いから始まっている。実際に石巻で販売されている商品を通して、「木の屋」には買い手の商品に対するメッセージを、避難所で活動する「ワタノハスマイル」には買い手の方に実際に商品を付けてもらった写真等、販売の様子を取めたアルバムを直接お渡しした。



●企画3：「心をつなぐ」

これは、石巻に住むある女の子の夢を応援する「企画」であった。しかし、長い時間現地にいた私たちは、その子自身の性格を知り、抱えている問題を通して、企画を変更し、「彼女にこれからの人生の糧となる様な経験をさせてあげる」ということを目的に変えた。私たちは、単に「一緒にいる」ということを選び、その子とだけでなく多くの子どもたちと長い時間、石巻にある簡易児童委託所で、生活を共にした。「一緒にいる」というのは、企画でもなく、問題へのアプローチという訳でもない。最終的に設定した「企画」は形を成さずに終わり、形としては何も残すことは出来なかった。しかし、一緒に多くのことを話し、いろいろなところに出かけ、笑ったり、泣いたり、時に怒ったり、子どもたちと過ごした時間を後悔したことはなかった。それは、将来子どもたちが覚えているかどうかはわからないが、その時、その一瞬「心つながり」を作ることができていたからである。

多くの石巻の方々、ボランティアの人々と一緒に長い時を過ごし、その関わりは被災者とボランティアではなく、人間同士の「絆」としての関わり合いであったと思う。今、将来「また会おう」と約束をできている人たちがいること、それが私たちの全てである。

(Link from 311 社会学部社会学科3年 金子亮介)

吉里吉里コミュニティ再生支援プロジェクト

【はじめに】

2011年3月11日、日本を大きな地震と津波が襲った。東日本大震災が奪っていったものはあまりにも大きく、10か月以上経った今も多くの方々の心に深い傷跡を残している。「今年の漢字」には「絆」が選ばれ、多くの人々が「自分に今何ができるのか、何をすべきなのか」を考え、悩みぬいたことと思う。私たち吉里吉里国復興支援部隊は、ボランティアセンターが立ち上げたDo for Smile@東日本プロジェクトの一つとして、4月から岩手県上閉伊郡大槌町にある吉里吉里地区の復興支援活動をしている。活動内容は多岐に渡るが、どの活動も地域の方と寄り添うことを大切にしている。変わりゆくニーズに対応した、きめ細やかな継続的支援を目指したいと思う。

【企画内容と経過】

私たちが支援活動を行っている吉里吉里地区は、震災当日から自家発電による電力供給を実現させたほど、地域住民のつながりの強いことが特徴である。住民の方々からは吉里吉里に対する郷土愛を強く感じ、活動中にも故郷のあたたかさを改めて感じる場面が今までに沢山あった。しかし、4月から6月の活動を通じて私たちが感じたのは、この地区でも震災の影響により仮設住宅や避難所へ生活の場が分かれたことによって、地域住民の方々同士の協力体制が取りづらい状況にあるということだった。復興に向けて、地域住民の協力体制が不可欠だと考えた私たちは、この地域の方々、震災後今までのコミュニティをより良いものへ再構築する過程を支援することにした。私たちは以下の4つの柱を中心に、コミュニティ再構築を目指している。

・レスパイトケア

この活動は、被災地で復興に向けて尽力されてきた方々の仕事を、私たちがお手伝いすることで休養を取っていただくことが目的である。復興は極めて長い道のりであり、その歩みを止めないためにも、休養は非常に需要である。今回私たちは、足浴の実施、側溝や使わなくなった避難所の掃除、草取り作業などを行った。特別養護老人ホームで実施した足浴では、施設利用者の方と昔の吉里吉里の話や、郷土料理の話など会話を交わしながら作業を進めることにより、さらに喜んでいただけた。

・学習支援

震災の影響により、授業が遅れてしまっていることや、先生方自身も被災者であることなどを考えると、生徒、先生双方のためにも学習支援活動が必要であると考えた。生徒により近い年齢の私たちが、学習支援を行うことで、授業や学習のサポートだけでなく、精神的サポートも期待できる。対象は主に吉里吉里地区内にある中学校の3年生で、受験に向けたサポートを行う。8月には吉里吉里中学校と大槌中学校にて学習支援を行い、9月以降も吉里吉里中学校で毎月実施している。また、9月には吉里吉里中学校が修学旅行で東京に来た際には、一緒に野球を観戦し、交流した。

・子ども遊びの実施（わんぱく広場の開催）

震災により、大切な家族や友たちを亡くした子どもたちが沢山いました。そして、家や公園などいつもの遊び場を失い、子どもたちが思い切り遊ぶ機会や場所が確保できない現状があった。子どもたちの心の傷を深く長く残さないようにするには、一日でもはやく普段通りに遊べる環境を整えることが必要であると考えた。私たちが、子どもたちの遊ぶ場所や交流しあう機会を設けることで、子ども同士の絆を深めあうことも期待できる。対象は主に小学生である。6月に第一回の子ども広場を設け、以降毎月わんぱく広場を実施している。現在は吉里吉里小学校のPTA 会長である芳賀新さんに、場所の確保や子どもへの案内などのご協力をいただいている。子どもたちと信頼関係が生まれ、会えない間に手紙をくれる子どもたちもいる。

・地域交流イベントの実施

住民の方々が、悩みや喜びを共有するための交流を目的としたイベントを実施する予定である。イベントには仮設住宅や在宅の方など、生活空間に関係なく参加していただくことで、地域のコミュニティ再構築へのサポートを目指す。初回の地域交流イベントは3月を予定しており、今後企画ごとの協力を強化していきたい。

【今後の課題】

現在は、3月に行う合同イベントについて企画代表者で話し合いを重ねている状況である。4月以降毎月吉里吉里を訪れたことで、企画ごとに地域の方々との繋がりは強くなってきたものの、最終目的であるその連携を図るような企画が実行できていない。また、メンバー内でも役割分担がうまくできていないことや、企画の核になって動けるメンバーの絶対数が足りていないことも問題になっており、今後の新規メンバーの受け入れ態勢についても検討が必要である。それぞれ知識や情報を深めることも重要なので、メンバー同士の意見交換や勉強会に加えて、NPOなどの他団体の方のお話を積極的に伺うことなども今後行っていきたいと思っている。吉里吉里の方からは、「明治学院大学が一番長いおつきあいだ」とのお言葉をいただいたこともある。一方で、復興に向けて力強く前を向く地域の方々の取り組みを見て、メンバーの中には、「震災復興支援ボランティアとして活動する必要があるのか」、「よりボランティアを必要としている地域に支援を行うべきなのではないか」などの疑問や意見も生まれてきた。「地域の方々と、最終的にどのような関係を目指すべきなのか」など、メンバー内でもっと意見交換をするべき課題も多くある。吉里吉里という特定の地域に特化した地域密着型の支援であることを生かし、地域の声に常に耳を傾け、この地域の新しいコミュニティ構築のサポートを続けていきたい。

（「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト 法学部法律学科3年 石谷友里）

写真展 ～コミュニティとコミュニティをつなぐ～

【はじめに】

私たちは国際 NGO Habitat for Humanity の日本学生支部として活動しており、海外での貧困居住問題の改善に取り組む海外支援団体のハビタット M G U である。主な活動としては、海外住居支援プログラムの GV (Global Village)、フィリピンのコミュニティ自立支援の PPP (Philippine Partnership Project)、そして国内では劣悪な居住環境に置かれている人々が世界に根強く存在するということを一人でも多くの方に知ってもらい、住居貧困問題に目を向けてもらえるような啓蒙活動を中心としている。

【企画の目的】

2011年3月11日の東日本大震災により多くの方々が大事なものを失ってしまった。その中で「家」を失った方は大勢いる。震災直後には、帰宅難民と化し「帰る場所」というものを誰もが意識した。この震災を経験した今、日本人は安心して暮らせる家の重要性を改めて感じていると思う。そこで、私たちだからこそ出来ることはないかと考えた。私たちは「家」を「すべてのはじまり」と考え、そして、家を拠点に多くを学び成長していった。また、安全な家は私たちに深い安心感を与えてくれる。「家」があることで、その住む人の一日一日への活力を持つことができ、その活力は無限の可能性へと繋がる。一日のはじまり、可能性のはじまり、人生のはじまり、「すべてのはじまり」が「家」にはある。このことを、家があることが当然だと思っている方々に知ってもらうこと、また、世界の貧困住居問題へ目を向けてもらうことを通して、その人なりに「家」とは何なのかを考えてほしい。それと同時に私たち学生が、世界の問題に取り組む姿勢を同じ世代の方たちに見てもらうことで国際協力を身近に感じてほしいと思った。そこで写真を手段に使うことで、私たち学生自身の目を見たものを直接視覚に訴えることによって、より「リアル」なものとして受け取ってほしいと考え、本企画の提案に至った。

【企画の内容】

中目黒にあるレンタルスペース“さくら”で写真展を開催することを決定し、2011年12月3日と4日に実施した。目黒川沿いに建っているきれいな景観の場所である。写真展の空間はひとつのストーリー的要素を取り入れた。はじめに、東日本大震災による破壊された多くの家屋の写真によって「家を失うこと」を伝える。また、震災からもたらされた問題を身近に感じ、共感してもらうことをねらいとしている。次に、私たちの活動の根本にある GV の活動写真を展示する。ここでは「家を手に入れること」をテーマとする。世界に根強く存在する貧困住居問題を訴え、そして GV によって確実に一人ずつ家を手に入れ幸せをつかんでいることを伝える。最後は「家を手に入れたあとの可能性」をテーマとした PPP の写真である。GV でつくられたコミュニティに住む人々のもつ可能性を発揮できるよう促進活動をする PPP、その中でクロスステッチという縫い物を扱った村の女性を対象にした経済支援や、村の活性化を促

す、祭りの活動を写真で紹介する。家が建ち、そこにコミュニティが成り立ち、人と人のつながりによって、また新たな可能性は生まれるということを伝えたいと思った。会場内には椅子とテーブルを用意し、ゆったりとした空間で、くつろぎながら写真展を楽しんで頂けたらという思いから、コーヒーとフィリピン産のバナナチップスを来場者の方に提供した。GV と PPP の報告ビデオも上映し、よりメッセージを伝えやすいものにした。また、来場者の方が参加できるものとして、牛乳パックで作ったレンガに見立てたもので家を建ててもらい、というワークショップも行った。レンガ一つ一つに「あなたにとって家とは？」という問いの答えを書き込み、それを一つの「家」として組み立てた。

【成果と課題】

今回の写真展の大きな成果は、写真展に来場してくれた明治学院大学の学生から GV 参加者が現れたことである。啓蒙活動により GV 参加者が増えることは、貧困住居がなくなることにつながるベストな成果であり、これからの私たちの活動への自信につながる。

しかし、今回の企画では反省するところが目立ち、課題も多く残る形となってしまった。事前の広報の作業が遅れたことによって来場者数の期待が見込めなかったこと、当日の物品搬入において時間がかかってしまい、時間通りに始められなかったこと等、準備不足が顕著に現れていた。企画の段階からしっかりとスケジュールを組み立てることで、この問題は解決できると思う。また、全体的に写真の数が少なかったと思う。私たちが撮る写真は写真展のために撮られたものではないので、見た情景をより多く見せることが、より伝えたいことも伝わるのではないかと思った。

なぜ写真展による啓蒙なのか、それは私たちが実際に目で見えたものをそのまま視覚に訴えることによって、私たちが現地で感じたこと、考えたことが伝わりやすいからである。また、私たち若者が発信することは、それだけでインパクトがある。しかしインパクトがある分、活動は慎重に行わなければならない。「どうしたら伝わるのか」「自分たちのすべきことは何か」を深く追求しなければ伝わるものも伝わらない。「貧困住居をなくす」ためのアプローチとして、今回の写真展の成果は小さかったかもしれないが、国内での私たちのできることは、その小さなことの積み重ねであり、いつかは大きな効果を与えるかもしれない。これから、この課題に真剣に取り組み、私たちの活動をよりよいものにしていきたいと思う。

【おわりに】

今回の写真展によって一人でも多く、私たちのメッセージが来場者に伝わり、その人自身がまた、何らかのアクションに繋がることを期待している。それが一歩ずつ、「貧困をなくす」ことにつながるのである。

今後に向け、今回の反省を活かし、更なる発展ができるよう心がけていきたいと思う。最後に、本写真展を開催するにあたり、広報の面で協力して下さった H.I.S. そして貴重な写真を提供して下さったハビタット・フォー・ヒューマニティー・ジャパンに感謝したい。

(ハビタットMGU 文学部芸術学科2年 坂上祐作)